

SER no.051; 序文

著者	西山 徳明
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	51
ページ	1-8
発行年	2004-03-29
URL	http://doi.org/10.15021/00001696

序 文

西山徳明

世界観光機関（WTO）の報告によれば、1950年にはわずか2,500万人であった世界全体の国外旅行者が、2000年には6億8,800万人に激増した。今後も2010年には10億人、2020年には16億人になると予想している。こうした膨大な数の人々が他国を訪れ、自国と異なる自然環境や文化、宗教等にふれることが、ツーリストの意図とは無縁なところで否応なく国際理解を推進することにつながり、そのことが21世紀における国家間の安全保障の基盤をなす可能性もある。こうしたことから、20世紀の石油に代わり、「ツーリズム」が、経済的側面に留まらない21世紀のグローバルフォース（世界を変える力）になるとも言われている（石森 2003a）。

20世紀後半に爆発的に興ってきたこうしたマスツーリズムは、それまで庶民にとってグラビアや映画の中にだけ存在した、世界に散在するあこがれの文化遺産や自然遺産を一気に身近なものにした。近年「維持可能な観光」として脚光を浴びているグリーン・ツーリズムやエコツーリズムが、マスツーリズムやリゾート・ツーリズムに対立する概念あるいはオルターナティブス（代替選択肢）として生まれてきたとすれば、こうした人類の遺産を資源とするヘリテージ・ツーリズムは、少なくとも初期には、マスツーリズムに後押しされて発展を遂げたと言える（西山 2002）。

貴重な遺産へのアクセスが容易となったこうした状況に対し、ユネスコ世界遺産委員会の相談機関であるICOMOS（国際記念物遺跡会議）は、1976年に「イコモス文化観光憲章（=ICOMOS Cultural Tourism Charter）」を採択した。そこでは、観光客を遺産の高潔性やとりまく環境を物的に脅かすものとしてとらえ、主に、遺産を訪れる観光客とそれを守ろうとする人々との緊張関係をいかに管理するかを遺産管理の最大の課題としていた。しかし四半世紀が過ぎた1999年、この憲章は改訂され、「国際文化観光憲章（=International Cultural Tourism Charter）」となって内容を一変させた。そこには、遺産は保護するだけでは護れず、訪問者がその正しい意味と重要性（=significance）を理解できるように、遺産に積極的にアクセスできる管理手法をとることが必要であると述べている。遺産保護に大衆レベルでの高い認識と支持がない限り、政策的にも資金的にも管理を続けることはできないという重要な事実を認めたのである（西山 2001a, 2002）。

これは、「遺産と訪問者（ツーリスト）の関係制御」から、「遺産とローカルコミュニティ（ホスト）と訪問者（ゲスト）の関係構築」へと、遺産とツーリズムの関係概念に大きなパラダイムシフトが起こったことを示している。

「ヘリテージ」という言葉は、訳せば「遺産」である。単にこれを「遺されたモノ」と理解すると、「役目を終えたモノ」や「過去を語るモノ」という意味になり、ヘリテ

ージ・ツーリズムは遺物を訪ね歩く年寄り臭い旅行ということになる。しかしここであつかうヘリテージ・ツーリズムの対象となる「ヘリテージ」とは、現代を生きる人類にとっての価値が説明できるものであり、その価値を子孫にも受け継がせたいと誰もが思う「遺したいモノ」、「継承したいモノ」である。このように理解すると「遺産」という言葉に、たちまち生き生きとした現代的意味が吹き込まれることになる。

日本における文化財保護の思想は、ともすれば保存すべき対象物として具体的、静的な「モノ」に特化する傾向がある。これに対し、世界遺産に関する様々な議論の中で聞くことのできる「遺産」の定義は、それら「モノ」自体はもとより、「モノ」を取り巻く人々の営みや「モノ」を維持継承していくシステムといった抽象的、動的な「コト」を、「遺産」の価値を一体的に形成する重要な要素としてとらえた包括的概念であることがわかる（河野 1995）。

本調査報告書ではヘリテージ・ツーリズムを、地球や地域の自然に対し永年にわたって人間が働きかけ続けた結果として生み出された遺産（＝文化遺産）を享受する行為であり、この遺産を媒体として現代まで継承してきた「モノ」と「コト」との関係性を、ホスト（＝ローカル・コミュニティ）とゲスト（＝ツーリスト）がともに再確認し合うことで異文化の交流を促進する機会ととらえている。これを実現していくには、遺産そのものを総合的に管理するヘリテージ・マネジメントとツーリズムとの持続可能な関係構築が不可欠である（西山 2002）。

本調査報告書の母体となる「文化遺産管理とツーリズムに関する研究」と題する研究会は、平成14年度より3か年にわたって開催しているもので、これは平成11～13年度共同研究「自律的観光の総合的研究」（代表石森秀三）において展開された「エコツーリズム」「ヘリテージ・ツーリズム」「エコミュージアム」「アーバン・ツーリズム」「観光とジェンダー」といった多岐にわたる現代的テーマをめぐる研究の流れを汲むものである。前述のような大きなパラダイムの転換を背景に、ツーリズムとの持続可能な関係を築きつつ図るべき文化遺産の保護・保全・維持・継承・活用（＝マネジメント）とはいかにあるべきかについて、日本を取り囲むアジア太平洋を中心とする地域における文化遺産マネジメントとツーリズム開発の動向を総合的に明らかにしつつ、世界遺産など様々な文化遺産を有する個々の事例地域の独自の遺産管理手法やツーリズム現象の制御手段を検証、整理し、遺産管理とツーリズムの持続可能な関係構築モデルを開発することを目指している。

この目的のため初年度は、世界および日本各地の文化遺産地域の最前線で活躍する文化人類学、都市計画学、社会学、経済学、環境計画学、経営学、観光デザイン学等の多岐にわたる分野の研究者や実践家を学際的に招聘し、それぞれのフィールドにおける調査、研究から、文化遺産マネジメントとツーリズムが顕著に関係している諸事例の報告を受けた。具体的にはテーマとするマネジメントの対象となる「集落・町並み遺産」「都

市遺産」「考古学的遺産」「自然遺産」の категорияごとに、文化遺産のとらえ方とその管理主体およびそれらとツーリズムの関係の展開状況について、国内外の様々な事例研究に基づく報告を受け、概念の整理と研究課題の所在を明確化した。「何をもって文化遺産とするか」あるいは「誰にとっての文化遺産か」といった、これまで曖昧にされていたマネジメントの対象や主体について、具体事例に基づいた議論ができたと考えている。

文化遺産と自然遺産の境をどこに引くかについての確定した定義はないが、本研究会では、どのような自然遺産であるにせよ、その遺産を巡るホスト社会との文化的関係がある限りは、それを文化遺産として広く理解することとした。例えば、全くの自然の創造物である富士山でさえ、それを崇拝し讃えてきた文化があることが、文化遺産である根拠となる。こうして捉えた文化遺産の範囲は広く、容易には理解できないため、図1のような「ツーリズム資源の固有性」と「ツーリズムが展開する空間とホスト社会の空間との分離度」を指標としたツーリズム形態の説明を試み、特に一部範疇外の自然遺産も含むヘリテージ・ツーリズムを4つに分類した。

まず「集落・町並み遺産」や「都市遺産」を資源とする類型は、多くの場合、遺産を創造した文化とホスト社会との文化的連続性がみられ、ホスト自身によるインタープリテーション可能な部分が多いことが、ツーリズムを成り立たせる上で利点となる。しか

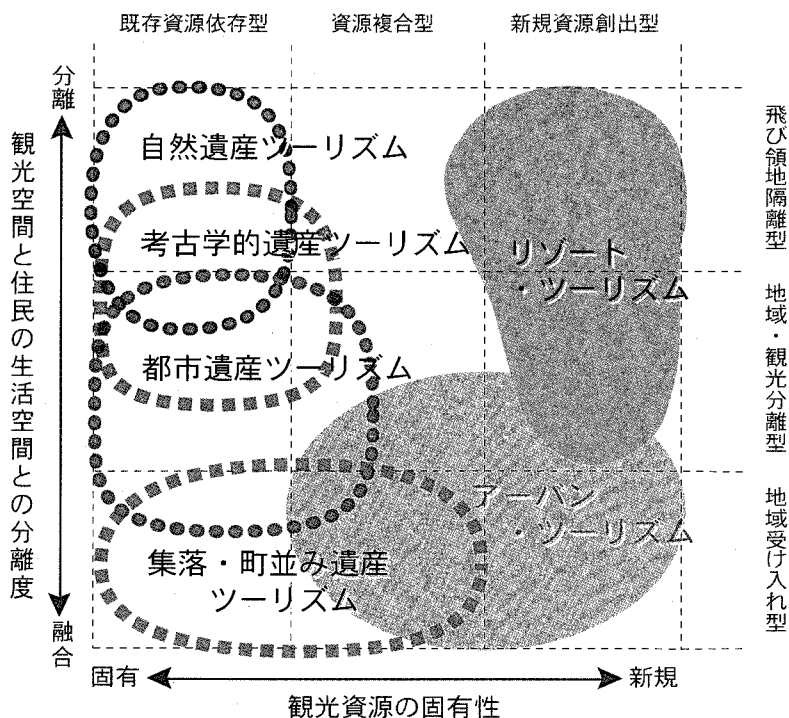


図1 「観光資源の固有化」と「観光開発と地域社会の空間分離度」から見たツーリズム類型

し、ゲストを迎え入れる空間が、実際に自分たちの生活する空間と重なるため、観光への迎合によるホスト社会の俗化や遺産そのものの変質などが起きやすく、注意深いマネジメントが必要となる(西山 2001b)。

「集落・町並み遺産ツーリズム」では、4つの事例に関して報告がなされている。山村氏は、世界遺産の町並みとして急発展を遂げる麗江古城の周辺に展開する、納西族の農村集落におけるツーリズム開発について論じている。経済基盤が脆弱な途上国の農村においては、ツーリズム開発のインパクトが非常に大きなものとなるため、自律的な発展には大変な困難が伴うことが予想されるが、開発当事者をめぐる伝統的な社会組織と近代的な行政組織の間に構築される関係によってはそれが可能な場合もあることを報告では示唆しており興味深い。西山・池ノ上は、ツーリズム収入をテコとして住民の手による文化遺産マネジメントを行うという日本においてはじめての試みである竹富島における遺産管理型NPOについて報告している。島の伝統的な地縁組織である「公民館」と近代的な組織であるNPOが協働し、対象とする文化遺産を特定したうえで法制度による保護までを含み行うマネジメントの手法を具体的に紹介している。窪田氏は、湾の埋め立て架橋問題で全国的に注目を集める鞆の町並み保存運動について報告している。すでに越えがたい対立に発展している行政対住民、住民間の軋轢のなかで、外部者としての研究者や学生が果たしうる役割とその限界が強く認識されている。景観や環境の価値を認める外部者が、内部の保全論者の住民と結束して開発推進論者たちに外圧をかけるという図式ではなく、新たなツーリズム形態を創り出すことによってそれら景観や環境の価値をツーリストとともに住民が再発見していくという道が示されている。改めて外部者としての研究者の今後の関わり方が問いただされる考察である。石川氏は、史跡としての長い保存の歴史の中で農村集落としての活力を衰退させ、観光地としての姿をもまた模索している世界遺産・上平村菅沼集落について報告している。この小集落では観光地化によるプライバシーの侵害や農作業の見せ物化による日常生活の阻害といった顕在化した問題とともに、10世帯に満たない地域住民に、ツーリストに対する五箇山地域の生活文化の表現が否応なく求められるという非常に辛い問題がある。それを解決すべく取り組まれた菅沼集落を核とした五箇山野外博物館構想の提案が論旨となっている。

「都市遺産ツーリズム」では、宮本氏は、ツーリズムの展開する舞台となる都市や集落・町並みについて、近年の都市史研究の知見を網羅し、その空間を成立させた歴史的特質と実際に成立した空間的特質、さらに視覚的現実としての景観的特質の3側面から日本の都市の遺産としての価値を説いている。木造建築のフローによって支えられてきた日本の都市という一般的な理解を否定し、近世末には百年を優に超える寿命をもつ優れた建築資産群によって構成されたストック型の都市が形成されていたことを証明している点は重要である。この見える都市遺産の探求に対し、森栗氏は見えない都市遺産に着目している。「都市とは、災害を前提とした一蓮托生のコミュニティである」とする視点

から、阪神大震災の災害復興における都市民が有していた都市の記憶の重要性を説き、「防災福祉コミュニティの協働活動の可能性と限界」を研修する修学旅行プログラムの実践という、見えない都市遺産ツーリズムを検証している。両氏の論考は、まさに「モノ」と「コト」を深く具有する都市という文化遺産の意味を気づかせてくれるものであり、それら遺産をマネジメントする主体であり、その価値を真っ先に享受すべき市民のあり方を問うていると言えよう。

「考古学的遺産ツーリズム」を考える際に特に着目したポイントは、多くの古代遺跡地域を例に引くまでもなく、遺産を生み出した文化と現在のホスト社会の有する文化との間に断絶があるという事実である。断絶した過去の文化を解説する仕事（＝インタープリテーション）は、考古学者や歴史学者ら専門家の手任せられることになる（西山2001b）。増井氏は、ガンダーラの遺産地域における、周辺住民による罪悪感を伴わない盗掘やツーリズムに偏重した遺跡整備手法といった問題に言及し、手渡された遺産と受けとるホスト社会の文化的関係の再創造、新たな架け橋を渡す可能性としてのツーリズムの重要な役割を指摘している。また関氏は、カニヤリの末裔が、自らの祖先を虐殺したインカの遺跡インガピルカを、自社会の観光資源へと巧みに組み替えていく生存戦略のプロセスを分析している。一方で矢野氏は、日本や海外の政府、自治体から依頼され、実際の遺跡に歴史的建造物を復元してきた経験に基づき、カルチャーツーリズムの対象として耐えうる質の高い遺跡整備のあり方に論究している。アジアや日本が有する遺跡の欧米との性質の違いをふまえた上で、テーマパークづくりに墮する危険性をもつ発展途上国における現在の遺跡整備思想の問題、あるいは日本におけるより高次元な展示思想を実現するための課題が事例とともに明解に示されている。

「自然遺産ツーリズム」は、かつて人が足を踏み入れたことのないような、文化遺産とは呼べない秘境の地を含め、ホストが不在であるか、またはホスト社会との距離が最も離れている地で展開するツーリズム類型である。西原氏はその一例として、20世紀半ばまでほとんど人の住まなかったガラパゴス諸島の事例を報告している。世界遺産の動植物やその生態系を見学に年間7万人以上の観光客が訪れているが、その恩恵を受けることもなく、貴重な生態系の保護にも理解を示さない急増した入植漁民と保護部局との対立の問題は深刻である。こうした住民との共生を前提とした遺産マネジメントでは、次世代への環境教育を柱としたホスト社会の能力形成が求められている。また斉藤氏は、希少性において顕著なガラパゴス諸島とは対極とも言える、日本のごく一般的ないくつかの農村集落を事例として取り上げ、それらの計画的な空間管理の必要性とそれに貢献しうるグリーンツーリズムのあり方に言及している。生産性という経済指標でのみ農村や農村空間を評価するのではなく、生物資源保全や国土保全、アメニティ維持、地域文化維持、地域社会維持といった多面的な機能から見たときに、その価値指標の多くがツーリズム資源として遺産をマネジメントする動機づけと共通するという重要な指摘がな

されており、グリーンツーリズム展開の意義が指摘されている。海津・真板両氏が論究するエコツーリズムは、必ずしも「自然遺産ツーリズム」のすべてを守備範囲とするものではないし、一部で誤解があるように、問題を抱えるマスツーリズムに取って代わるオルタナティブ・ツーリズムでもないとは筆者は理解している。私見であるが、エコツーリズムとは、自然を人から遠ざけて護るのではなく、ツーリズムを導入することによってむしろ人に近づけてその正しい意味と価値を知らせ、それによって生まれる自然への畏敬と得られる経済利益によって、より優れて自然を護ろうとするムーブメントであるにとらえるべきである。エコツーリズムの有するあまりにまばゆい理念に幻惑され、それがあたかもマスツーリズムの抱える諸問題を解決してくれる魔法の杖であると妄想して勝手に失望したり、うまくはかどらない導入の現実に逆恨みをするのは賢明ではない。これからのエコツーリズムが、一方で純粋なムーブメントとして理念を発展させつつ、実践はグリーンツーリズムやエコミュージアムなどの新たなツーリズム・システムの中で広がっていくのか、あるいはエコツーリズムという概念と実践範囲をさらに拡大させ、あらゆるツーリズム形態を飲み込むような展開を見せていくのかが注目される。そう考えていくと、エコツーリズムは第二世代を迎えたという両氏の論調が意義をもってくるであろう。

本研究会を開催した背景のひとつには、筆者が近年目にしたタイ、カンボジア、インドネシア、中国、韓国といったアジア諸国が、ツーリズムという国家をまたぐ経済的・文化的インパクトをいかに受け止め内部化するかを国家の主要施策に据え、国力を傾けて国際文化観光を実現するための基盤整備や文化遺産管理に懸命に取り組んでいる、という事実がある。彼らにとって、観光政策は当然ながら主要な経済振興政策である。しかし同時にその取り組みは、自らの国や地域、民族を再認識し再表現する文化再構築の機会となっており、場合によっては特定の文化遺産が、国家や民族統一のスローガンにさえ使われている。これを観光に頼った経済政策に過ぎないとする見方は浅薄であろう。多くの国民や政府関係者、あるいはODA等に関わる諸外国人の人々が協働して、当該国の文化遺産や文化そのものの保存・継承、再創造、そしてその適切な表現のあり方について知恵を絞り、訪問客たちとの異文化交流の現場からのフィードバックを再び文化遺産マネジメントに生かしていく、そういう行為の懸命な繰り返しが、文化やアイデンティティの再構築をもたらしていることに着目すべきである（西山2002）。

一方、日本はどうか。年間1,600万人の国民を海外に送り出しながら、500万人しか外国人訪問客を受け入れていないという数字が、近年よく取りざたされている。だがその政府は、こうした将来世界におけるツーリズムの果たす役割の大きさと自国の立ち後れを自覚しているようには見えない。2003年初頭に政府が打ち出した「ビジット・ジャパン・キャンペーン」は、果たして正しい国際理解を促進する観光政策展開の方向を示しているだろうか。今年度からは、本研究会の有志メンバーによる「文化遺産管理とツー

リズムの持続可能な関係構築に関する研究～東アジア諸国と日本の比較による」と題する科研費補助を得たため、アジア・太平洋地域を対象とした新たな研究展開が可能となった。様々な国や地域において、文化遺産を抱える地域社会とツーリズムがどのような発展段階にあり、そこでホストとゲストのいかなる関係がつけられようとしているか。より新鮮で具体的な情報を多方面より収集、分析し報告できると考えている。

最後に本調査報告書の刊行に当たって、論文を執筆いただいた共同研究員および特別講師、非共同研究員参加の研究者の皆様方にご協力を感謝したい。また、本調査報告の編集作業において、お力添えを頂いた九州芸術工科大学大学院生の高崎恵子さんに謝意を表したい。

文 献

石森秀三

- 2001a 「内発的観光開発と自律的観光」石森秀三・西山徳明編『ヘリテージ・ツーリズムの総合的研究』(国立民族学博物館調査報告21), pp.5-19。
- 2001b 「21世紀における自律的観光の可能性」石森秀三・真板昭夫編『エコツーリズムの総合的研究』(国立民族学博物館調査報告23), pp.5-14。
- 2003a 「観光ビッグバンとアジアの都市観光」大阪市立大学大学院文学研究科アジア都市文化学教室・橋爪紳也編『アジア都市文化学の可能性』(大阪市立大学文学研究科叢書1), pp.41-52。
- 2003b 「序文」石森秀三・安福恵美子編『観光とジェンダー』(国立民族学博物館調査報告37), pp.1-4。

池ノ上真一・西山徳明

- 2004 「文化遺産の明確化とその管理状況——沖縄県・竹富島における文化遺産マネジメントとツーリズムに関する研究 その1」『日本建築学会計画系論文集』No.575, pp.61-67。

河野靖

- 1995 『文化遺産の保存と国際協力』風響社。

高口愛・西山徳明

- 2000 「伝統的景観管理とその変遷——竹富島集落における景観管理能力の発展条件に関する研究 その1」『日本建築学会計画系論文集』No.538, pp.133-140。

西山徳明

- 2001a 「自律的観光とヘリテージ・ツーリズム」石森秀三・西山徳明編『ヘリテージ・ツーリズムの総合的研究』(国立民族学博物館調査報告21), pp.21-36。
- 2001b 「ヘリテージ・ツーリズムと歴史的環境の保全——白川村合掌集落における自律的観光の実現と課題」石森秀三・西山徳明編『ヘリテージ・ツーリズムの総合的研究』(国立民族学博物館調査報告21), pp.61-80。
- 2002 「ヘリテージ・ツーリズムの現在」『地域開発(特集 新しいツーリズムの展開と地域おこし)』Vol.458, pp.21-25, 財団法人日本地域開発センター。

2003a 「都市における文化遺産のマネジメント」大阪市立大学大学院文学研究科アジア都市文化学教室・橋爪紳也編『アジア都市文化学の可能性』（大阪市立大学文学研究科叢書1），pp.215-222。

2003b 「文化遺産をめぐるホストとゲストの持続可能な関係とは」『民博通信』No.102, pp.18-19, 大阪：国立民族学博物館。

真板昭夫

2001 「エコツーリズムの定義と概念形成にかかわる史的考察」石森秀三・真板昭夫編『エコツーリズムの総合的研究』（国立民族学博物館調査報告23），pp.15-40, 大阪：国立民族学博物館。

益田兼房

1995 「世界遺産条約——文化遺産からみたそのしくみと日本の課題」『講座 文明と環境第12巻 文化遺産の保存と環境』pp.250-257, 朝倉書店。